

オーディオチェック(6)  
—オーディオチェックアナログ(3)—

1. 始めに

前報(5)に引き続き、アナログ再生でのチェックを実施します。

2. オーディオチェックアナログの実施方法

アナログの再生経路は前報(4)のとおりです。

使用するチェックシステムは次のものです。

日本オーディオ協会 オーディオチェックレコード AD-1



カートリッジ、トーンアーム、ターンテーブル等の測定に欠かせない代表的なテスト信号を収録したオーディオチェックレコード（30 cm LP アナログレコード - 33 回転盤）です。

AD-1 収録信号内容：

**SIDE 1：**

バンド1：周波数スロースイープ信号、20Hz - 20kHz、左チャンネル

バンド2：周波数スロースイープ信号、20Hz - 20kHz、右チャンネル

バンド3：機械インピーダンス測定用信号

バンド4：低域共振測定用低域周波数スイープ信号、4Hz - 100Hz、左チャンネル  
右チャンネル

バンド5：ワウフラッター測定用信号、3,000Hz、約 100 秒間

**SIDE 2：**

バンド1：1/3 オクターブバンド・ノイズ、中心周波数 25Hz - 16kHz、左チャンネル  
右チャンネル

バンド2；1/3 オクターブバンド・ノイズ、中心周波数 25Hz - 16kHz、右チャンネル

ル

バンド2と3の中間部 無音溝（インサイドフォース測定バンド）

バンド3：位相チェック信号、左右同相、逆相、 $\pm 45$ 度、 $\pm 90$ 度、 $\pm 135$ 度

バンド4：基準レベル、1kHz、3.54cm/sec（尖頭値）、左チャンネル

バンド5：基準レベル、1kHz、3.54cm/sec（尖頭値）、右チャンネル

バンド6：無音溝

バンドの構成を見てのとおり、前報(5)と同様で、前報(5)の日本コロムビア盤の原盤から作り直したもののようです。なお、次のタイトルで **JAS Journal** に解説が出ています。

### [日本オーディオ協会の測定用アナログディスク AD-1](#)

#### 3. オーディオチェックアナログの実施結果

バンドの構成もナレーションもまったく前報(5)と同様で、前報(5)と差異がでるかどうかに着目して聴いていきます。なお、システム側の変更点は、前報(5)の結果をうけてインサイトフォースキャンセラーを調整していることです。

**SIDE 1**のバンド1とバンド2は、前報(5)と同様の結果でした。

バンド3は、右チャンネルの250Hzでビリつきがあり、左チャンネルの31.5Hzで共振が認められることは前報(5)と同様です。

バンド4は、前報(5)と同様、右チャンネルで音として聴こえない低域でスピーカーのバタつきが少しあります。

バンド5は、前報(5)のゆっくりした音の揺れは感じられず、前報(5)とは盤が違い、レコードの偏心があまりないのではないかと思います。

**SIDE 2**のバンド1とバンド2は、前報(5)と同様です。1/3オクターブバンド・ノイズでは、ビリつきや共振はありません。

バンド2と3の中間部の無音溝（インサイドフォース測定バンド）は、前報(5)でインサイトフォースキャンセラーを調整しているにもかかわらず、内側にシフトしましたので再度調整しました。

バンド3は、前報(5)と同様でしたが、注意深く聴くと、 $\pm 135$ 度は逆相に近い印象でした。

バンド4とバンド5は、前報(5)と同様でした。

バンド6は、前報(5)と同様で、S/Nが満足できるレベルでした。

#### 4. まとめ前報(5)

前報(5)の再現が得られ、**SIDE 1**のバンド3とバンド4では、ビリつきや共振が認められましたが、1/3バンドスイープなどではそういった現象は認められないことも同様でした。無音溝でのインサイドフォースのチェックでは、キャンセラーの設

定を再度やり直しました。その他は特に問題を認めませんでした。

以上